

2021年8月29日（日）「結論」

《聖書協会共同訳》 コヘレトの言葉 12:8-14

- 8 空の空、とコヘレトは言う。一切は空である。
- 9 さて、コヘレトは知恵ある者であり、さらに知識を民に与えた。彼はまた多くの格言を探し出し、吟味し、分類した。
- 10 コヘレトは喜ばしい言葉を見つけ出そうと努め、真実の言葉を正しく書き留めた。
- 11 知恵ある者の言葉は、突き棒や打ち込まれた釘に似ている。集められた言葉は一人の牧者から与えられた。
- 12 わが子よ、これ以外のことにも注意せよ。書物はいくら記しても果てしなく、体はいくら学んでも疲れるばかり。
- 13 聞き取ったすべての言葉の結論。神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ人間のすべてである。
- 14 神は善であれ悪であれ、あらゆる隠されたことについてすべての業を裁かれる。

《新改訳 2017》 伝道者の書 12:8-14

- 8 空の空。伝道者は言う。すべては空。
- 9 伝道者は知恵ある者であった。そのうえ、知識を民に教えた。彼は思索し、探究し、多くの箴言をまとめた。
- 10 伝道者は適切なことばを探し求め、真理のことばをまっすぐに書き記した。
- 11 知恵のある者たちのことばは突き棒のようなもの、それらが編纂された書はよく打ち付けられた釘のようなもの。これらは一人の牧者によって与えられた。
- 12 わが子よ、さらに次のことにも気をつけよ。多くの書物を書くのはきりが無い。学びに没頭すると、からだが疲れる。
- 13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。
- 14 神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。

## 【序論】

コヘレトの言葉からの説教も、今日で最終回となります。12:8-14は本書の「あとがき」となりますが、これまでに語られてきた大半の内容とは別の書き手による付記であろうと考える研究者もいます。古代より「枠物語<sup>1</sup>」(frame narrative) という文学技法があり、起源は紀元前1千年紀のインドにまで遡ることができるそうです。そう考えると、本書が書かれた時代と近いこととなりますので、世界の文学様式がヘブライ文学でも用いられていると見ることもできるでしょう。

---

<sup>1</sup> 「枠物語」とは、「導入部の物語を外枠として、その内側に、短い物語を埋め込んでいく入れ子構造の物語形式」(Wikipedia)。

「杵物語」の一例として『千夜一夜物語（アラビアンナイト）』が挙げられますが、そこでは女性不信のシャーリアール王に嫁いだ妻シェヘラザードが連夜興味深いおとぎ話を語って聞かせる「劇中劇」として描かれています。

子どもにも親しみを持ってもらえるように別の例を挙げますと、『スーパーストーリー』の最初と最後の部分は現代の子どもたち（クリス、ジョイ、ロビック）の日常を描いていますが、その間に聖書物語が挟み込まれるので、これと似た構造になっていると言えるでしょう。ただ、『スーパーストーリー』では主人公の子どもたちが聖書の世界に入っていきますので、「杵物語」を超えているとも言えます。

コヘレトの言葉を「杵物語」として理解するならば、1:1-11 と 12:8-14 の部分は「外杵」に当たり、その間に実際の「コヘレトの言葉」が挟み込まれているという形になるでしょう。つまり、今日の箇所は「外杵の尻尾」に当たるということです。

## 【本論】

### 本論 1. 空の空

**空の空、とコヘレトは言う。一切は空である。（12:8）**

「コヘレトは言う」とあるように、もう一人の語り手（frame narrator）が「本書全体ではそう言われてきた」とまとめに入ったと読むことができます。念のため、1:1-2 に戻ってみましょう。

**ダビデの子、エルサレムの王、コヘレトの言葉。**

**コヘレトは言う。空の空、空の空、一切は空である。**

「本書では全体としてこういうことが語られていきますよ」「その著者はコヘレトですよ」と冒頭で紹介され、まとめで再び同じ言葉が出てきたこととなります。そして、本文の中で何度も「空の空」という言葉が目印となって登場してきました。繰り返しになりますが、「空」に当たるヘブライ語「ヘベル」は「息」を意味し、人の息が瞬く間に消えていくものであることを表しています。目に見える世界、消えゆく世界、やがて終わる人生の空しさを、コヘレトはこの言葉を用いて滔々と語ってきました。空しい人生をどう生きるか、空しいからこそ何が必要であるかがテーマであった。

### 本論 2. コヘレトの業績（9-11 節）

次に、フレームナレーターはコヘレトの業績をまとめていきます。

さて、コヘレトは知恵ある者であり、さらに知識を民に与えた。彼はまた多くの格言を探し出し、吟味し、分類した。(12:9)

ここでは、コヘレトについて第三者的に語られているのが分かるでしょう。彼は知恵と知識を民に与えたと。「知恵」とは、今日の箇所です最終的に結論づけられるように「神を畏れる」ということです。自分に命を与えてくださった神、人生の主権者である神を認めて生きる。これこそ、「空しい人生」に永遠が入り込む道。

フレームナレーターはコヘレトの勤勉さを認めてもいます。「探し出し、吟味し、分類した」という様々な動詞を用いて、コヘレトが研究に多くの時間とエネルギーを費やしたことを語っている。彼が集めた「格言」の中には、この世に満ち溢れている多くのことばも含まれていたことでしょう。その中から選りすぐりのもの、神と人との関係が構築されうるものを選び、自分のことばでまとめ上げたのです。

コヘレトは喜ばしい言葉を見つけ出そうと努め、真実の言葉を正しく書き留めた。(12:10)

「喜ばしい言葉」「真実の言葉」という二つの表現が出てきます。喜びばかりを与えようとすると、人に媚びへつらうような言葉になるかもしれません。しかし、彼は聞きたくない内容も包み隠さずに語ってきました。それは預言者の役割とも似ています。

知恵ある者の言葉は、突き棒や打ち込まれた釘に似ている。集められた言葉は一人の牧者から与えられた。(12:11)

「突き棒」とは、羊飼いが羊を突いて正しい道へと進ませるための棒。「打ち込まれた釘」とは、二つの材が動かないように固定する役割を果たすものです。つまり、コヘレトの言葉を真摯に受け止めた人は、その「知恵の言葉」によって人生の方向が正され、「神との関係」という基礎がしっかり心に据えられたはずです。

「一人の牧者」というのは、コヘレト自身というよりも神を指すでしょう。コヘレトが書いた言葉ではありますが、その言葉を最初から最後まで導いてくださったのは神であったと。

### 本論 3. 知恵の選択 (12 節)

わが子よ、これ以外のことにも注意せよ。書物はいくら記しても果てしなく、体はいくら学んでも疲れるばかり。(12:12)

フレームナレーターは、自分が「コヘレトの言葉」を紹介している弟子たちに対して語りかけています。その中には私たち日本の読者も含まれていると見てよいでしょう。「これ以外のこと」とは、本書以外の「世の知恵」「世の知識」を指します。この世界には多くの書物が溢れていますが、人が一生の間に読めるものは限られている。何を読むかに

よって、私たちの思想は形成されます。だから、よく吟味して選ばなくてはならない。私たちにとって最も大切なのは何であるか。主イエスがマルタに言われたことばが思い起こされます。「しかし、必要なことは一つだけである」(ルカ 10:42)。人はまず神のことばを聞く必要があるのです。

#### 本論 4. 語り手の結論 (13-14 節)

フレームナレーターはこの物語をいよいよ締めくくります。コヘレトの言葉を聞いてきた者としての結論です。

**聞き取ったすべての言葉の結論。神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ人間のすべてである。(12:13)**

「私がコヘレトから学んだこととはこうであった。それは、神を畏れ、神の戒めを守るということであった」と。人生とは瞬く間に過ぎ行く「空しいもの」であるからこそ、その心に神を置かなくてはならない。確かに、人生の営みは日々同じことが延々と繰り返される空しいものであるかもしれませんが、しかし、そのすべてを神からの賜物と認め、一つひとつの物事に心からの感謝を持って生きていくこともできます。それが、神を畏れるということの本質でありました。そして、神への愛は「神の戒めを守る」ところに現れてくるのです。キリスト者としてこの言葉を自らに適用してみましょう。

**イエスは答えて言われた。「私を愛する人は、私の言葉を守る。私の父はその人を愛され、父と私とはその人のところに行き、一緒に住む。私を愛さない者は、私の言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は私のものではなく、私をお遣わしになった父のものである。(ヨハネ 14:23-24)**

そして、いよいよ本書最後の節となります。

**神は善であれ悪であれ、あらゆる隠されたことについてすべての業を裁かれる。(12:14)**  
コヘレトの心、そして彼から学んできたフレームナレーターの心には「永遠への思い」があります。最後の審判を常に心に置いて生きることを読者に勧めている。「審き」という言葉には恐いイメージが伴いますが、それは私たちが不義なる人間であることを自覚しているからでしょう。この心に何かしらの曲がったものがあることを知っているからです。それらすべてをご存知であられる神の御前に誠実に生きるとはどういうことか。それは、自分の罪を認めて生きることです。また同時に、それらの罪はキリストにあって赦されていると信じることです。やがてすべての真実が明らかにされるとき、私たちの罪は「赦された罪」として開示されることでしょう。

## 【結論】

これにて「コヘレトの言葉」からの学びを完了させていただきます。重要なことは、一書を学び終えたときに、私たち読者の心に何が残っているかということです。フレームナレーターはそれを振り返らせてくれました。

- ・ 人生は過ぎ行く息のようなものである。
- ・ しかし、私たちはこの一生の中で神との交わりを持ち、永遠を有することができる。
- ・ 地上の一つひとつの営みを、主にあって喜び味わうことができる。

## 【祈り】

有限なる人生にいのちの息吹を吹き込み給う、天の父なる神様。私たちは地上のものを愛するとき、いつしか空しさの友となっています。自分がやがて、それらと共に泡と消えていく存在であることに、ふと気がつくことがあるのです。この地上で蓄えたものとは何であったのか。しかし、そのような空しさの中に、あなたは来てくださいました。神との永遠の交わりの内に置いてくださった、あなたの御名を誉め讃えます。この道を終わりまで歩み抜き、やがてあなたと顔と顔とを合わせて相見える日を待ち望ませてください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

アルファにしてオメガ、初めにして終わりであり給う、父なる神の愛、  
人の空しい人生に降りきたり、神との交わりへと導き給う、主イエス・キリストの恵み、  
地上の営みを、主にあって喜び樂しませ、永遠とのつながりを持たせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。